

研究部 原本

昭和二十年度（昭和二十一年一月—三月）研究報告 其一

日本語教授の各段階における

教材及び教法大要

財団法人 言語文化研究所 研究部

（立案擔當者） 主事 上 甲 幹 一

② 8.7 外一 打込ス

<p>第二期 130</p>	<p>第一期 200時間</p>
<p>音聲言語活動 確立期 (半創造期)</p>	<p>音聲言語活動 修練期 (模倣期)</p>
<p>1110</p>	<p>通計時數 — 200 100 100</p>
<p>行動系列教材中心 副教材Ⅰ 社交會話</p>	<p>導入期間—學習用語中心 A期間 B期間 數系列教材中心 副教材Ⅱ 社交會話初步</p>
<p>直觀的 教材中心</p>	<p>純直觀的 教材</p>
<p>教材の形式と 教法の重視</p>	

日本語教授の段階一覽 (立案者)
 前國立北京師範大學助教
 言語文化研究所研究部主事
 上甲幹一



<p>第三期 170</p> <p>音聲言語活動 擴充期 (創造期) 文字言語活動 修練期</p> <p>三三一</p> <p>華文化的教材中心 (童話、萬話類)</p> <p>直觀的觀 念的教材</p>	<p>第四期 200</p> <p>文字言語活動 確立期 音聲言語活動 擴充期</p> <p>五〇一</p> <p>文化的教材中心 (文化一般)</p> <p>觀念的 教材中心</p>
<p>五〇〇</p>	<p>七〇〇</p>
<p>教材の内容 の重視</p>	

日本語教授の各段階における教壇大要 (昭和二十二年三月・第二次)

第一期

導入期

B

1. 学習用語の原形(假文)をきかせる
〔多く、直観法による意味を理解させながら〕
2. その原形を用いてたづねる
〔多く、原形と極めて近似した文型で〕
3. 答へさせる
4. 学習用語の原形をきかせる
5. (註)この期の後半から發音指導の取扱を開始
1. 教材の題目をきかせる
2. 教材の原形(全体又は分節)をきかせる
〔多く、字と字の類を見せながら〕
3. 原形について問答する〔構成要素、分析〕
4. 原形をきかせる
5. 原形について問答する〔筋の把握〕
6. 原形をきかせる

A

1. 後才の原形(全体を分節)をまかせ
2. 原形について問答する [構成要素の分析]
3. 原形をまかせ
4. 原形を話させる
5. 原形(全体)をまかせ
6. 原形(全体)を話させる
7. 原形(全体)をまかせ
8. 新出の発音符号の発音書と練習させる

7. 原形を話させる
8. 本教材をまかせ
9. 変形教材を話させる
10. 原形をまかせ
11. 原形を要約して話させる
12. 原形をまかせ
13. 原形を発音符号で書かせたり読ませたりする。
14. 簡単な文型帰納練習をさせる

第二期

1. 教材の題目をまかせ
2. 先行教材(全体又は分節)をまかせ
[多く、得意絵の類を見せながら]
3. 先行教材について問答する [構文要素の分析]
4. 先行教材をまかせ
5. 先行教材について問答する [筋の把握]
6. 先行教材をまかせ
7. 先行教材を話させる
8. 本教材の原形をまかせ
9. 原形の大意を話させる
10. 原形をまかせ

2x4 5x10 13x3

2x4 5x10 13x3

11. 原形について回答する。「筋の把握」
 12. 原形をかきかせる
 13. 筋を述べて、主要事項につき半ば自由の「読ませる」
 「多く、板書を助けながら」
 14. 原形をかきかせる
 15. 本教材の主題を発見させる
 16. 教材を應用的に展開し自由にはかきかせる
 「多く、ついで絵の類を見せながら」
 17. 回答により模範的を語を構成して話させる
 18. 本教材の原形を発音符号で書かせたり読ませたりする
 19. 既習教材と対比して文型帰納練習をさせる
- (註) この期の末通から発音符号と対比して、平かなと漢字の取扱を開始

第三期

1. 教材の題目をかきかせる
2. 本教材の先行教材となるべき絵の題を提示し「自由に話させる」
3. 回答により標準的な語を構成して話させる
4. 本教材の原文を讀んで話させる
5. 読方について質問をかきかせる
6. 読ませる
7. 回答する。「構成要素の分析」
8. 讀んでかきかせる
9. 読ませる
10. 大意を話させる
11. 未知事項を解説する。「多く、印刷物を用いて」
12. 意味についての質問をかきかせる
13. 讀んでかきかせる

14. 読ませる
15. 問答する「筋の把握及び心理の分析」
16. 読んでもかせる
17. 黙読させる
18. 教材の主題を発見させる
19. 黙読させる
20. 原文を要約して読ませる
21. 読ませる
22. 感想を発表させる
23. 読ませる
24. 文脈を中心として文の表現形式を研究させる
25. 読んでもかせる

第四期

1. 教材の原文を讀ませる
2. 読んでもかせる
3. 読方に関する質問をさせる
4. 読ませる
5. 大意を讀ませる
6. 意味に関する質問をさせる
7. 読んでもかせる
8. 読ませる
9. 読方について相互に批評させる
10. 読んでもかせる
11. 読ませる
12. 問答する「筋の把握及び心理の分析」
13. 読んでもかせる

14. 黙読させる。
15. 教材の主題を尋ねさせる。
16. 作者の歴史的社会的立場を解説する。
17. 黙読させる。
18. 作者の作風観の方向と密度を教材について研究させる。
19. 読んで見させる。
20. 読ませる。
21. 教材の形式性を中心として文の表現形式を研究させる。
22. 教材の歴史的社会的価値を論じさせ、断念する。
23. 読ませる。
24. 読んで見させる。
25. 主要事項に対し文法語法上から解説する。
26. 感想文を綴らせる。
27. 実録文を添削修正してやる。

日本語教授の各段階における教材例

第一期(A) 教材例 「スウジ」

- ↑
- 0 コレワ カズノ ミシデス。
 - 1 コレモ カズノ モシデス。
 - 2 コレモ ヤハリ カズノ モシデス。
 - 8 9 コレモ コレモ ヤハリ カズノ モシデス。
 - 0 9 コレカラ コレマデ ドレモ ミシナ
カズノ モシデス。

(=)

カズノ モジオ スウジト イイマエ。
 スウシオ ミマスト、カズガ フカリマス。
 7. ロシワ シチデス。
 15. コレフ ジョウゴデス。
 28. コレフ ニジウハチデス。
 カズノ コトバフ タラサン アリマス。
 シカシ カズノ モジ ツマリ スウジフ
 レエカラ アマデシカ アンマセン。

第一期 (B) 教材例 「カイモノ」

アル ^{ガクモエガ} アル ガクモエヒンデ イロイロナ
 カイマシタ。

^{ガクモエヒンオ}
 カクモエヒンオ

イッホロ ニシウゴセン ニンピツオ イチダアス。
 イッサツ ニエンゴジッセン。ザッキオオ サヤツ。
 エトロン ロクホン インキオ エヒン。
 イッポン ニエンゴジッセン フデオ ニホム。
 *^{シタケ} カイマシタ。
 ノシテ シウエンサツ サンマイ ダシテ オツリオ ハナヒムゴジッセン
 モリイマシタ。

コノ カンゴオフ ツギノ トオリデス。

マズ イホン ニジウゴセン エンゴ^オ イチカアスデカラ ニジウゴセン

ジウニバイデ サメエンニ ナリマス。 コレガ エンゴ^ン ネダシデス。

ソレカラ イサツ ニエンゴジッセン。 ザツキチオオ サンサツデスカラ ニエン

ゴジッセン。 ナナエンゴジッセン。 コレガ ザツキチオン ネダシデス。

ソレカラ ヒトエンゴ^ン ロウエン。 インキオ ヒトエンデスカラ ロウエンデ。 コレガ

インキン。 ネダシ。

オシマイニ イホン ニエンゴジッセン。 フデオ ニホンデスカラ ~~ニエンゴジッセン~~

ニバイデ エン。 コレガ フレン。 ネダシ。

コレヲ ミチ タスト、サンゴタス。 ナナエンゴジッセン。 タス、ロウエン。 タスニエンデ

コトケヒ ニジウイチエンゴジッセンニ ナリマス。

ソレニ ダイシデ ジウエンサツ。 サンマイ。 ツマリ。 サンジウエンオ。 タシタシデスナラ
ナツウエン。 コウ。 ニジウイチエンゴジッセンデ。 オツリフ。 バチエンゴジッセンニ
ナツウ。 ワケデス。

第二期教材例 「ウサギトカメ」

コレヲ カメデス。 コレヲ ウサギデス。 コレヲ ウサギトカメデス。

カメガ ノハラオ。 アルイテイマシタ。 ウイエン。 オツク。 ノロノロト。 アルイテイマシタ。

ニニエ。 ウサギガ。 キマシタ。 ウサギヲ。 ダイエン。 ハヤク。 ハシ。 チキマシタ。 メンテ。 マシタ。

オソイ。 カメオ。 ミマシタ。

ウサギヲ。 カメガ。 ダイエン。 オツク。 アルキマシタ。 「カメサン。 カメサン。 アモウ。 アルク

コトガ。 オソイ。 アカキマシタ。 オソイ。 ダイエン。 オソイ。 マシタ。 カメオ。 ミマシタ。

トテモ カワ コトフ デキマセンネ。ト ウライマシタ。ソレデ カメワ ソレデフ ウサギ
ヤノ、ヤノコノ ヤマン、ウエマデ、ウチクラベオ、シマンヨオ。ト イイマシタ。
ノハラカラ ヤママデフ トオイデス。カワモ アーマス。オカモ アリマス。
ウサギワ カメト イ、シヨミ、ナラビマシタ。ソシテ ウサギト カメワ ハシリジンマシタ。
ウサギト カメガ カタクラベオ ハジメマシタ。
ウサギワ ハヤク ハシリマシタ。ドントント タイヘン ハヤク ハシリマシタ。ウサギワ
ノハラモ トオリマシタ。カワモ フクリマシタ。オカモ トオリマシタ。ソシテ ヤマン
シタマデ キマシタ。ソシテ カメノ ホオオ ミマシタ。カメワマデ ノハラオ アルイデ
イマシタ。ソレデ、ウサギワ ハル コノ、ツメテ、ヤマン、シタデ、スアリマシタ。ソレデ
オ トジマシタ。ソシテ、グウクウ、ネムリマシタ。ウサギワ トモウデ、ヒルネオ
シマシタ。

カメワ イ、シヨオケンメエ アルキマシタ。ノハラモ トオリマシタ。ヤスマカイデ、アルキ
マシタ。カワモ フクリマシタ。ヤスマカイデ、アルキマシタ。オカモ トオリマシタ。ヤスマ
カイデ、アルキマシタ。ヤマン、シタマデ、キマシタ。ウサギワ、トイニウデ、ヒルネオシテ
カスンデイマシタガ、カメワ、ヤスマカイデ、トオトオ、ヤマン、ウエマデ、キマシタ。
ウサギワ、マダ、キテイマセンデシタ。
ハヤイ、ウサギワ、マダ、ヤマン、ウエニ、キマセンデシタガ、オソイ、カメワ、ヤマン、ウエニ
キマシタ。ハヤイ、ウサギワ、オソイ、カメガ、ハヤク、キマシタ。オソイ、カメガ
カチマシタ。ハヤイ、ウサギガ、マケマシタ。

或所に一人の紳士がありました。

かねてから自動車の運轉手をさがしてをりましたが、どうも適當な人がみつかりませんので、新聞に募集廣告を出しました。

すると、その翌日、三人の志願者がやってきました。この三人はいずれも相當に格好のよい者でした。

紳士は三人を一人一人自分の室へ呼び入れて、次の様な質問を試みました。

「君を雇入れる前に、ひとつきいてみたいことがある。もし自動車を走らせ、

ある時、もう少しで人をひきさうになつたら、どうしてそれを巧くよけることができるか、

か。

きかれた男はさも得意さうに答へました。

「そのことならば、かねて経験もございますから、一尺手前でさ」と止めてごらん
いれます。」

譯もないやうに言ひますと、紳士はうなづきなから、

「うん、さうか、それは偉い。よろしい、もとの室に控へておなさい。雇ひか雇

はぬかは女とで知らせるから。」

紳士は次の男を呼んで、又前と同じことを問ひました。その男は

「旦那、その御心配は御無用です。私はこれまでに何處もさういふ場合

にはあつたことが、五寸のところまでみごとくに喰ひ止めて、左を一度も仕損

じたこととはございません。」

紳士は感心したやうに、

「なるほど、君はなかなか偉い。よろしい、もとの室で待っておなさい。後

返事をするから。」

今度は三番目の男が入ってきました。紳士はその男にも前と同じことを尋ねました。するとその男は紳士の顔を見ながら申しました。

「旦那様、そのおたねには何とお答へしてよいかわかりません。実は私はこれまで人をひきさうな危いことを一度もしたことがありませんし、又今後そんなことは恐ろしくなからうと思ひますから。」

紳士は思はず手を拍って、

「なぜ、君は実に感心だ！私の望んでゐたのは、その心掛であつた。さうなうてはだめだ。」

といて、すぐこの男を高い給料で雇ひ入れたといふことです。

第四期教材例 ———— 新校長の決断

東京の第一高等学校では「学生は正々堂々と正門から出入すべし」といふ規約があつて、校舎が本郷にあつた頃は正門が一つだけで、裏門はなかつたのです。格別森校長は正門主義を強調したもので、昭和十年に校舎が今の駒場に移つてからも裏門があるにかかはらず、閉め切りにして使はせませんでした。

同校地は七万坪もあつて、それを半周するだけでも二十分かかるくらいなのに、門があつた一つでは不便の上もありません。

それも裏門がちゃんとあるにかかはらず、閉め切つて使はせないのですから、誰でも開けて通らせばいいのと思ひました。出入りの商人なども裏門を開けるやうに何回も数願したのですが、いざしこも傳統となるとそれを護る信念が磐石の如き学生たちは頑として許さないのです。学校の方ではどうにもできなかつたのです。

このことについての安倍校長の感想は、「一概に自派といふ傳統にしても非合群をものは改めていかなければならぬ。とて、学生がしんぞこからは納得がなすよ、^{當局者}ありき所ない感情を減してゐるのこ、^{後著}故を著はかりがたまはしるのも老成のたがまは、自分たちが持つてゐるものに、^{後著}後著と感ぜると同時に、新しいものについての野蠻力も旺盛なのであるから、この二つの面をうまく調和させて新体制を築いていくことが肝要な。裏門は開いたが学生が道徳観として正門主義を奉ずるならそれもまた善いことであるから、それを打ちつづけるがいい。そして裏門は必要が女で開かれてゐるのだから、それには別にかかはらなければ存存さういひのである。』といふのでした。

〔昭和二年三月八日 林川 龍之介〕

第四期教材例——「みかん」

林川 龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀港止り二等客車のすみに腰を下して、ぼんやり発車のをえを待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、少しく私の外に一人も乗客は居なかつた。外をのぞくと、薄暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、たゞ、そりに入れられたトバが一びき、時々悲しさうにまゑ立ててゐた。とれらにその時の私の心持と、不意識をくらむにつかはしい景色だつた。私の頭の中には言ふような左い疲労とけんたいとが、まるで雪霰りの空のようなとんよとした影を落してゐた。私は外をうのポケットへいっつと両手をつつとんだまゝ、そこにはいつてゐる夕刊を出して、見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて発車のふえが鳴つた。私はかすか存心のくつろぎを感じながら、後の窓わくへ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる／＼と後ずさりを始め、るのを待つともなく待ちかまへてゐた。ところがそれよりも先にけたま

もしびたの足音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言ふのいしる聲と共に、私の乗つてゐる二等車の戸がかりりと開いて、三四の小娘が一人、あわただしく中へはいつて来た。と同時に一つずしりとゆれて、おもむろに汽車は動き出した。一本づつ眼を区切つて行くプラットフォームの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに、クツプの音を言つてゐる赤帽——さういふすべを、窓へ吹きつける煙の中に、うれんがましく、後へ倒れて行った。私はやうやくほつとした心持になつて来た。どこに火をつけながら始めてものういまぶたを上げて、前の席に寝る下してゐた小娘の顔を、ちよつと見た。

それは、あぐらけの無いかみも、つめにつめて、様なでの跡のある、ひらひらけの、両ほゝを、気味の悪い程、赤くほてらせた、いかにもおなかな者らしい娘を、見た。しかも、おなかな、みみ、萌黄色の、も糸の、えり巻が、ならりと、垂れ下つた。おなかなの上には、大きな、ふろしき、包みがあつた。その包みを、たいしたし、もやけの、手の中には、三等の、赤きつぷが、大事さうに、しつかりに、きられてゐた。私は、こ

の小娘の、下品な、顔立ちを、好まなかつた。それから、彼女の、服装が、不けつな、おなかな、やはり、不快な、た、最後に、その、二等と、三等と、の、区別さへも、わきまへない、おなかな、心な、が、腹立たし、かつた。だから、巻たばこに、火をつけ、私は、一つには、この、小娘の、存在を、忘れた、いとい、心持も、あつて、今度は、わたしの、夕刊を、まん然と、おなかな、の上に、掲げて、見た。すると、その、時、夕刊の、紙面に、落ちて、みた、外光が、突然、電燈の、光に、変つて、刷りの、悪い、何欄か、の、活字が、意外に、くらくら、おなかな、私に、私の、眼の前へ、浮かんで、来た。言ふまでもなく、汽車は、今、横須賀線に、多い、トンネルの、氣

初の、それへ、はいつた、のである。し、かし、その、電燈の、光に、照らされた、夕刊の、氣面を、見渡しても、やはり、私の、ゆらゆら、つな、心を、なぐさめる、には、世間は、餘りに、平凡な、出来事ばかりで、持ちきつてゐた。私は、トンネルへ、はいつた、一瞬間、汽車の、走つてゐる、方向が、まやくに、なつた。やうな、錯覚を、感じながら、それらの、少しも、興味の、感じられない、記事から、記事へ、ほとんど、機械的に、眼を通した。が、その、間も、もちろん、おなかな、小娘が、また、か

えず意識せずにはゐられなかつた。このトンネルの中の汽車と、このおなかの
の小娘と、さうして又この平凡な記事にうづまつてゐる夕刊と——これが象
徴でなくて何であらう。私は一切かくだらなくって、読みかけた夕刊をばり
出すと、又窓わくに頭をもたせながら、死んだまうに眼をつぶつて、うつら／＼
し始めた。

それから幾分か遅さを後であつた。ふと何かにおびやかされたような心持
がして、思はずあたりを見廻すと、いつの間にか何の小娘が向かい側から席を
私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしてゐる。が、重いガラス戸はなかく
思ふように上らないうらしい。女のひざをたうけのほしはよく、赤くなくて、時々
はなをすり込む音や、小さな息の切れる聲と一筋に、せはしなく耳へはいつ
て来る。これはもちろん私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違な
かつた。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかゝらうとしてゐること
は、暮色の中にかれ草ばかり明るい両側の山腹が間近に窓側にせまつて来た
のでも、すぐにかてんの行くことをあつた。にもかゝらずこの小娘は、わあ／＼

しめてある窓の戸を開けようとする。——その理由が私にはのみ込めなかつ
た。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれかとしか考へられなかつた。を
から私は、腹の底には依怱としてけはしい感情をたくはへながら、あのしもや
けの手がガラス戸をもち上げようとして、悪戯苦闘する様子を見、まるでそれが
永久に成功しないことでもいふような冷たい眼で眺めてゐた。すると間も
なくすさまじい音を立てて、汽車がトンネルへはいると同時に、小娘の顔はよ
うとしたガラス戸は、とう／＼ぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角を穴の
中から、すゝをとかしたようなどす黒い空気が、にはかに息苦しい煙になつて
もろ／＼と車内へみなまり出した。元來のどろ痛めてゐた私は、ハンカチを顔
に當てるひまさへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんども息も
つけない程せき込まなければならなかつた。が、小娘は私にとんちやくする気
色も見えず、窓から外へ首をのびして、やみを吹く風に髪のもをさよがせながら
ら、いつと汽車の進む方向を見やうと見やうと見やうと見やうと見やうと見やうと見
めた時、もう窓の外が見る／＼明るくなつて、そこから土のほみや水のほ

みかひややかに流れ込んで来なかつたら、やうやくせきやんを私は、この見知
らない小娘を頭ごなしにしまりつけてでも、また元の通り窓の戸をしめさせ
たのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もうやすく、とトンネルをすべりぬけて、かれ
草の山と山との間にはさまれた或食しい町はぐれのみみ切に通りがさつて
おたのみ切の近くにはいづれもみすぼらしいわら屋根やかほら屋根がのみ
こみとせま苦しく連て込んでのみみ切番が振るのであらう、たどりゆうの草
白い旗がものうげに暮色をゆすつてゐた。やうとトンネルを出たと思ひ、
そのものさざしいのみ切のさくの向かふに、私はほくの赤い三人の男の
こが並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天におしすくめられたか
思はれる程、そろつてせいがか低かつた。さうして又この町はぐれのさざしい風
物と同じような色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、
せいに手を挙げるが早い、かはいいのとを高くさうせて、何とも意味のわか
らない聲を一生けんめいにほとぼしらせ、するとその瞬間である。窓から半

身を乗り出して、みだ例の小娘が、あのしもやけの手を一つのぼして、勢よく左
右に振つたと思ふと、たちまち心をどらすばかり暖かな日の色に染つてゐ
るみかんがおよそ五つ六つ、汽車を見送つた子供達の上へぼらくと空から
降つて来た。私は思はず息をのんだ。さうしてせつなに一切を了解した。おそら
くはこれから奉公先へおもむかうとしてゐるその小娘は、そのふところにい
れてゐる後つかのみかんを窓から投げて、わさくのみみ切まで見送りに来た
芽達の子に報いたのである。

暮色を帯びた町はづれののみみ切と、小鳥のように聲を上げた三人の子供達
と、さうしてその上にはらくと落ちるおまやかなみかんの色と——すべて
は汽車の窓の外に、またよくみまもたくり通り返した。が、私の心の上には、せつな
い程はつきりと、この光景がやきつけられた。さうしてそこから、或得休の知れ
ないほがらかな心持がわき上つて来るのを意識した。私は勢よく頭を上げて
まさきで別人を見るように、あの小娘を注視した。小娘はいつかもう私の前の席
に帰って相変らずひびからけのほくを萌莖色の毛糸のえり巻にうづみなが

ら、大きなふきしき包みをかへた手にしつかりと三等きつるをにきつてゐる。
私ほどの時始めて言ふよりのない疲労とけんたいを、さうしてまた不可解な、下等な、たいくつな人生を僅かに忘れることが出来た。